

今回の個別フォローでは、最初に子供が通う学校で起きた事件について話しました。

"良い人"に見えていた先生が起こした事件について、どうしてそうなったのだろうという思いを引きずっていました。

陽子さんから、そんな風に見えている人だからこそ、そんな風に周りにつけられたレッテルに縛られて、ダメな部分を出したり、なりふり構わず周りに助けを求められず、例えば「騙された」などの突発的なリスクに対応できなかったのではないかと話してくれました。そのことが子供にとっての教訓になるとも話してくれました。

人間には良い面と悪い面があり、完全に良い人も、完全に悪い人もいない、人間だからどちらの側の人もいるということを知ること子供にとって学びになるのではと伝えてくれました。

陽子さんから教訓を一つ一つ抽出してもらうことで、ようやく私の中で事件を落ち着いて取り出して思い返すことが出来たと思っています。

今、私が取り組んでいる、子供に対する「過保護」脱却の取り組みについても、毎日意識して書くことに取り組めたというのは大きな一歩と陽子さんから話しながらも、これまでは意識していなかった周りとの比較をするようになったことが、逆に、周りが幼かった場合に、周りと一緒にだから大丈夫だと安心してしまうのではないかと言う懸念があると伝えられました。

そういった変化したからこそその懸念も、今ある取り組みを続けることで、克服していきたいと思いました。

過去から何度も陽子さんが伝えてくれていたのに取り組みがどうして定着しなかったのかという質問を受け、私の中で勝手に「完了」した感覚があったということを話しました。

陽子さんにその感覚を伝えるのが難しかったのですが、それは現実とは違うけれど、完了したから向き合わなくて大丈夫という位置づけにしてごまかしていたということです。

それが今、どうして取り組もうとなったかという話になり、結局は論理的な納得より先に「いい加減まずい」という危機感が私を動かしたという現実を理解しました。

クラスAのメンバーでも原動力が異なるという話にもなり、その仕組みを知っていることで書かれたコメントを理解して、意味のある質問が出来るのだと思いました。

メンバーの書いていた人物像について私が読み違えていたことについても、無意識に切り取った、自己開示の足りなさを注意深く読み取って自力で気付き、伝えられるようにならないといけないのだと思いました。

また最近、私が気になっている職場の後輩について、陽子さんから「ASD」の可能性を伝えられました。

併せて本人が困っていなければ改善しようとはならないし、外側から見た可能性だけで周りの人を納得させるための理由付けとして病名(の可能性)を使ってはいけないのだということも伝えられました。

私が気付いたのが直近であり、本人が周りとの違いをどこまで意識しているのか、それで困っているのかが分からない現状がある一方で、他のメンバーからの戸惑いの声を聞くことが多く、後輩と周りの関係の改善のために出来ることをしたいと思いました。

陽子さんから、陽子さん自身の大変だった経験と併せて、私がここで「ASD(グレー)」のメンバーと向き合うことが、今後の糧になると伝えてもらいました。

2025年も、集団で、1対1で、またテキストメッセージでと、たくさんのお話を伝えて頂きありがとうございました。

2026年も今やっている取り組みを継続し、陽子さんが伝えてくれるメッセージに少しでも近づくために、さらに上の目線を目指す取り組みも続けたいと思っています。

(A.S 40代女性 大阪府)